

平成 29 年度 傾斜的研究費（部局長裁量経費）看護学科 成果報告書

看護教育・研究の国際化推進と人材育成

首都大学東京 健康福祉学部 看護学科

2018 年 3 月

海外研究者特別招聘

看護科学域では、2018年2月16日～19日の期間に、米国の University of New Hampshire の准教授 Gene Harkless 氏を招聘し、本学教員、学部生、大学院生を対象とした講演会「米国における家族看護 NP の活動－Nurse Practitioner/Advanced practice Registered Nurse: Perspectives from the United States－」を開催した。参加者からは活発な質問があり、NP の活動について理解を深めることができた。

また、University of New Hampshire 大学における看護基礎教育、大学院教育について講義を頂くと共に、本学教員との意見交換を行った。



Gene Harkless

DNSc, APRN, FNP-BC,

CNL, FAANP,

Chair and Associate Professor

「米国における家族看護 NP の活動」講演の概要

北米では、Nurse Practitioner (NP) は保健医療において重要な役割を果たしている。NP は、プライマリケアの担い手として外来診療や処方を行っている。NP の裁量権の範囲は、北米の州によって異なるが、ニューハンプシャーは、州の看護協会が NP を管理し、診療行為に医師の監視も協力も必要ない州のひとつである。NP の教育は、大学院で実施されている。NP の活動の発展のためには、NP がケアを提供することによる医療費の削減や、その効果について示すことが重要となる。これまでの、調査結果から NP の医療の質は医師とほぼ同等かそれ以上であることが示されている。

NP が地域で活動していくためには、医師の理解も重要であるが、地域住民のニーズに適切に応えていくことが必要である。

海外招聘プログラム

日程	内容
2月16日	1. 看護学科教員との教育・研究交流 1)ニューハンプシャー大学の看護教育・短期海外留学制度 2)米国の Family Nurse Practitioner 教育
2月19日	2. 講演「米国における家族看護 NP の活動」 3. 今後の研究活動、国際交流に関する意見交換

(担当：安達久美子、石川陽子)

国際化に向けた教員と学生のための英語研修

1. 目的

英語による講義や研究発表のために、教員と学生の語学能力の向上をめざすことを目的とする。

2. 方法

英語研修を企画・運営する。平成 29 年度に開催した英語ワークショップの日程などは、以下のとおりである。

日時・場所	内容
6月30日(水) 15:00~20:00 場所: 463 教室	Academic Writing: basic 講師: 西川マリ 参加者: 計 15 名 (院生 13 名 (前期課程 7 名、後期課程 6 名)、教員 2 名)
9月22日 17:00~20:00 場所: 463 教室	Poster Presentation: basic 講師: 西川マリ 参加者: 8 名 (教員 3 名、院生 5 名)
12月22日 17:00~20:00 場所: 463 教室	ワークショップ: 英語でのプレゼンテーション 講師: 西川マリ 参加者: 5 名 (教員 2 名、院生 3 名)

3. 結果

1) 第 1 回英語ワークショップの参加者アンケート

- ・難しく、全体的についていけなかった。講義も何を言っているのがわからなかった。ある程度英語ができないと難しい研修だと思う。
- ・英語の聞き取る力、読む力がないとせつかくの講義がもったいない気がした。5 時間の長さで週末という自分の体力の限界だった。
- ・難しかった。
- ・授業の多い時期だと休み希望が通らず、夜勤明けでの受講になってしまい、集中できなかった (自己問題ですが) ので、出来れば授業の落ち着いた時がいいと思う。
- ・よくある間違い+よく出てくる注意すべきことをもう少し丁寧に伺えると、グループワークの質が上がるように感じた。資料をいただけると嬉しい。
- ・ある程度の英語のレベルが必要。参加者によって英語レベルが違う。レベルの低い人に合わせるのも、高い人に合わせるのも問題と思う。→レベル別の講義を希望する。

- ・少なくとも、自分は全くついていけなかった。英語での論文作成や学会発表の予定はないので、役立った気がしない。いずれする時でも忘れていると思う。そういう予定がある人が参加した方がよいと思った。
- ・5時間でしたが、あっという間でした。論文の読み込みが足りなかったせいか、ワークに時間がかかった。もう少しでまとめそうなタイミングだったので、それが心残りですが、自分に足りないものを再確認できたので、前には進めそう。ありがとうございました。
- ・5時間は長いと思いましたが、あっという間に終わったような気がした。定期的開催してほしい。グループワークでは、短期集中で **Thinking** できた。通訳に助けられた。
- ・あっという間の5時間だった。スライドの pdf があると嬉しい。
- ・ありがとうございました。いろんな書き方、そしてポイントをおさえる機会になった。
- ・ネイティブの英語をたくさん聞ける良い機会になった。
- ・休憩時間を短くして、もっとたくさん講義やグループワークに時間を割きたかった。
- ・とても充実したクラスだった。
- ・もう少し短い時間で回数が多い方がいいのかなと思った。
- ・継続することでかなり力がつくクラスだと思う。Thanks.

2) 第2回・第3回英語ワークショップの状況

第2回、第3回は、英語での学会発表に関するプレゼンテーションについてのワークショップを開催した。2回目はポスター作成として、参加者の抄録案などをもとに、ポスターを作成した。また、インターネット上に無料で公開されているテンプレートなどの情報提供もあった。3回目は、オーラルプレゼンテーション（基本編）として、講義後に1人3分くらいのマイクロプレゼンテーションを実施した。

参考) ポスター作成についてのコンテンツ

Colin Purrington's templates

<http://colinpurrington.com/tips/poster-design>

Power Point

<https://templates.office.com/ja-JP/templates-for-PowerPoint>

Poster presentations. Com

https://www.posterpresentations.com/html/free_poster_templates.html

4. 今後の課題

初回は大学院生の参加が多かったが、学生の英語の習得状況が異なり、英語での授業そのものが難しかったという意見もあった。2回目以降はプレゼンテーションということで、さらに難易度が高いという印象もあったためか、博士後期課程の学生のみの参加であった。講義は、国際学会発表にすぐに役に立つ内容であったため、より多くの大学院生が参加しやすい設定や周知のしかたを工夫する必要がある。

平成 29 年度 傾斜的研究費（部局長裁量）

学部生・大学院生・教員のための英語ワークショップ

ここ数年、英語研修を実施していますが、今年度は3回企画しました！

いずれも、英語論文の執筆や学会等での発表（ポスターや口演）について、基本を学ぶことを目的としています。また、実際の執筆や発表に即つながらようワークショップ形式の実践的な研修としました。大学院生はもちろん、学部生や教員の皆さんも、各自のテーマをもってぜひ参加してください！皆で楽しく学びましょう！

開催予定

対象：健康福祉学部の学部生・人間健康科学研究科の大学院生および教員（各回定員 20 名）

第 1 回 Academic Writing - basic - 2017 年 6 月 30 日（金）15:00～20:00（5 時間）

第 2 回 Poster Presentation - basic - 2017 年 9 月 22 日（金）17:00～20:00（3 時間）

第 3 回 Oral Presentation - basic - 2017 年 12 月 20 日（水）頃で調整中

講師 西川マリ (Nishikawa Mary) ←昨年度に続きお越しいただきます！

米国にて高校の教師（化学）を務めた後、大手製薬会社にて研究者として AIDS 治療薬の研究に従事。同社日本法人へ移籍後は約 10 年間、社内のドキュメント・レビュー及び社内の英語トレーニングを担当。

その後、日本で長くメディカル・ライターとして活躍。現在は教育、執筆活動に専念するため独立し、大学等で研究者を対象としたセミナー・ワークショップの講師を担当している。ライティングのプロとして、特に医学・ライフサイエンス分野の専門知識に知悉し、明確で分かりやすい論文の執筆に定評がある。また、日本人の研究者・医師が誤りやすいクセやミスについても詳しい。日本語は日常会話レベル（日本語検定 2 級取得）。

留意事項

本ワークショップは英語で行われますが、日本語での質問も可能です。講師も状況に応じ、日本語で答えてくれます。また、グループワークで実際に書き方の検討をするため、その素材（ex. 執筆中の英語論文の一部、学会発表予定のポスター原稿や読み原稿など）をぜひ提供してください。

申し込み

各回 **1 週間前までに**島田・齊藤までメールにてお申し込みください。場所は後日連絡します。

- 1) 氏名・所属・学年
- 2) 各回テーマに合わせたグループワークのための素材提供の可否

担当：看護学科 島田 (megumi@tmu.ac.jp)・齊藤 (saito@tmu.ac.jp)

(担当：島田恵、齊藤恵美子)

看護研究講習会

1. 研究成果の社会への還元

2017年9月4日（月）開催

母性看護専門看護師であり博士号取得後、病院勤務の傍ら NPO「妊婦の暮らし」を立ち上げ、理事長として活躍されている長坂桂子氏を講師として実践—研究—社会への還元をどのように具現化するかをお話しいただきました。

参加者には助産学専攻科学生も多く、起業も含めた将来へのロールモデルの提示となりました。



2. 質的研究者のための量的研究

2018年2月27日（火）開催

Florence Nightingale Passionate statistician



慶応義塾大学医学部衛生学公衆衛生学の竹内文乃氏を講師にお迎えし、質的研究者が量的研究を理解する際に役立つ基礎的な統計解析の解説をしていただきました。

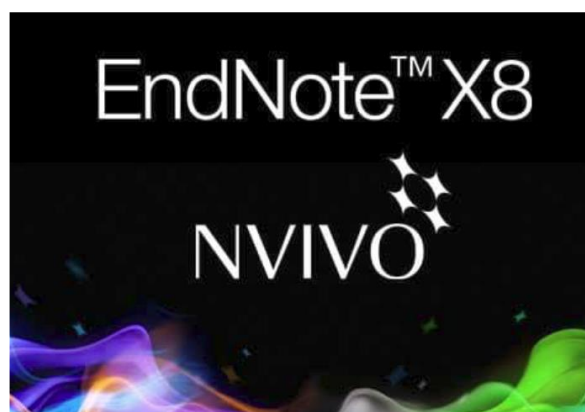
統計学の歴史やトレンド等もお話しいただき、楽しみながら理解を深めることができました。質的研究者のみならず、量的研究者にとっても、研究指導の際の説明に役に立つ講義となりました。

3. EndNote と NVivo の使い方

2018年3月1日（木）開催

ユサコ株式会社に EndNote や NVivo の初心者向け講習会を開催しました。学内で EndNote がライセンス導入（教員向け）されたため、タイムリーな講習会となりました。

今回は入門編でしたが、参加者からは応用編の開催への期待が多く聞かれました。



（担当：坂井志織、石川陽子）

看護学科ブランディングに関する調査

「首都大生」らしさを言語化するために、2018年12月～2019年1月に、専門機関に委託して、3種類の調査（インターネット調査、学生へのグループ・インタビュー、教員への個別インタビュー）を行った。

インターネットによる調査は看護学科在籍の学生1～4名（計322名）に実施した。回収率は、52.8%であった。グループ・インタビューは学部2年生（3名）および3年生（5名）に各1回行った。教員6名には約1時間のインタビューを行った。

調査の内容は、学生へは、首都大学東京を希望した理由や受験を決める際に参考にした情報、将来のキャリアイメージ、教員との関係であり、教員へは、学生の傾向や印象、他大学と比較した本学の強みや弱み等であった。

本学の学生像として、以下の傾向を見出すことができた。データなどの詳細は、別に報告する。

- ✓ 入学時よりも入学後の方が大学生活に満足している。
- ✓ 教員の授業の質の高さに満足し、授業に真面目に取り組んでいる。
- ✓ 臨床からの外部講師の授業に満足し、看護職への興味を高めている。
- ✓ 実習時の教員の帯同を手厚いサポートであると認識し、実習に取り決めていると感じている。
- ✓ 様々な医療機関での実習をとおして、柔軟さとタフさが備わっている。
- ✓ 他学部との交流が盛んで、友人が多い。
- ✓ 総合大学の良さを実感し、看護教育以外の授業を楽しんでいる。
- ✓ 情報リテラシーが高い。
- ✓ ハードな教育カリキュラムを一緒になって頑張れる友人がいる。 他

これらの傾向は、今後、HPなどの媒体で見えるようにしていくとともに、教育にも生かしていきたい。併せて、こうした傾向を作っている背景について、卒業生などにも協力を得て調査をし、「首都大」のブランディングに活かしていきたい。

（担当：西村ユミ）

<個別研究>

看護大学生における乳幼児との接触経験と養護性および次世代育成能力
に関する研究

Nurturance and capability to nurture the next generation: Effects
of nursing college students' contact experience with infants

園部真美（Mami Sonobe） 木村千里（Chisato Kimura）

研究成果の概要（和文）

看護大学生における乳幼児との接触経験が養護性、次世代育成能力、育児支援に関する学びにどのように関連するかを調べることを目的に、大学 2～4 年生を対象に質問紙調査を実施した。いずれの尺度得点も乳幼児との接触経験がある学生の方が高い平均得点を示した。育児支援に関する学びは、接触経験の効果に加えて、4 つの下位尺度のうち「全般的支援」と「子どもの扱い」において、学年が進むにつれて平均得点が上昇した。乳幼児との接触経験があると養護性、次世代育成能力、育児支援に関する学びが育まれることが明らかとなった。育児支援に関する学びについてはそれに加えて大学での教育の効果も示唆された。

研究成果の概要（英文）

To explore how nursing college students' contact experience with infants relates to nurturance, next generation nurturing capability, and learning of childcare support skills, a survey was conducted with 2nd~4th year nursing college students. Students with experience of contact with infants scored higher on most scales than those without experience. Additionally, regarding learning of childcare support skills, two subscales of four, "general support" and "childcare support", increased with school year. Experience with infants enhances nurturance, capability to nurture the next generation, and learning of childcare support skills. College education had an additional effect on learning of childcare support skills.

主な発表論文等

- 1) 園部真美, 木村千里, 大森貴秀, 臼井雅美: 看護大学生の乳幼児との接触経験が育児支援に関する学びに与える影響, 第 11 回乳幼児保健学会学術集会, 2017.9
- 2) Mami Sonobe, Chisato Kimura, Takahide Omori, Masami Usui: Effects of nursing college students' contact experience with infants, 21st East Asian Forum of Nursing Scholars & 11th International Nursing Conferences, 2018.1